

中部人懇通信 No.4

学級担任
対象

平成26年9月30日(火)に、赤碕文化センターで学級担任を対象とした中部地区人権教育懇談会を開催しました。その内容を報告します。

現地研修「差別の現実から深く学び、反差別の輪と文化を生活の中に」

講師の先生方

琴浦町立赤碕文化センター

- ・館長 西村敦郎さん
- ・生活相談員 前田英敏さん
- ・指導員 澤田春美さん
- ・児童厚生員 澤田直美さん



大タブの木の下面にて

《講師のお話より》

- 自分の仲間の暮らしや命を自分たちで大切にしようという思いがあったから、くり返し話し合いをし、たくさんの人の思いを統一できた。
- 部落差別をなくしたいという強い願いから、まずは住環境を整えようと立ち上がった。住み慣れた土地を離れ、家を建てることは簡単なことではなかった。そこには、相手を思いやる優しい気持ちと絶対やり遂げるという強い気持ちがあった。
- 何かを決めるときにじゃんけんやくじ引きに頼っていないか。とことん話し合うことで解決しようとしているか。子どもたちに話合いで解決する力をつけてほしい。
- 村の人々は成美橋を架けたり、広げたりする運動に取り組んだ。自分たちだけでなく、すべての人々の「命を守り」「生活をつくる」取組だった。



成美橋にて

グループ協議「自校の課題とその解決に向けた取組について」

グループ協議では、子どもたちの生活実態から見られる課題に対し、学校や学級で行っていく人権意識を育む取組や実践について話し合いました。「人権について自ら課題をもって調べる学習をしているが、学んだことで自分をどう変えるかが課題である」、「自分たちの周りにはいろいろな人がいることを理解するために学校間交流をしている」、「仲間づくりの基本は、大人の姿。大人がつながらあっているのか、大人が姿勢を示す」など、意見が交わされました。

【参加者の感想より】

- 他の地区にも同和対策事業で新しくできた町がある。その事業を思い浮かべながら、「子どもの将来のために」「みんなのために」話し合いを積み重ねてきたという共通点があった。
- 「人は学ぶことで変わることができる」という姿勢は、教える立場の私たちが忘れてはならないことだと痛感した。
- 地区の人々が自分のことだけでなく、周りの人々や子や孫のことを思い、強い願いをもってあきらめずに様々な運動に取り組まれたことが心に残った。
- 子どもたちの成長のためには学級内の困りごとや友達とのトラブル等を話し合って解決することが必要だと感じた。時には苦しいことも体験させながら、友達とつながること、自分の思いを伝えることを学ばせたい。
- フィールドワークをはじめとして、知識を教え込むのではなく、子どもたちが肌で感じ、思いをもてる人権教育をしていきたい。そして、人との結びつきの大切さを感じさせていきたい。

【まとめ】

フィールドワークを通して、地区の人々の差別解消に向けた熱い思いや粘り強く立ち向かってこられたたくましさに改めて気づくことができました。「自分の命も人の命も大事」として取り組まれた解放運動の思いや成果を受け継いでいくためにも、現地研修は意味ある大切なものだと思います。今回の研修を通して、さらに自分の生き方をふり返り、同和教育で培われてきたことを明日からの人権教育の充実にかかしていきたいと思います。